

2002 . 7

白石区民のページ page

白石区インターネットホームページ
<http://www.city.sapporo.jp/shiroishi/>
白石区民公式サイト「shiroishi.org」
<http://www.shiroishi.org/>

「粋と笑い」を生業にする人がいる。いや、いたというべきか。その職業を「幫間」という。「幫」は助けるの意で、宴席の間をつなぎ、座を盛り上げる人。いわゆる「太鼓持ち」のことだ。時代劇や落語の世界で描かれる単なるごますりのお調子者とはちよつと違う。お座敷遊びの案内人で、客の心の内を感じ取って楽しませるプロフェッショナルなのである。話上手なことは言うに及ばず、端唄、小唄や踊りなどに長けた芸達者。その芸は、人間国宝に指定された人もいるほどだ。

「お客を楽しませるための粋で機知に富んだ芸。それが魅力ですね」。板垣さんは幫間芸にほれ込んだ理由をこう話す。「雑学亭於そ松師匠との出会いがそもそもの始まり。師匠は、幫間芸の持つ独特の『匂い』を伝えていくこと、長年研究を続けている人でね。幫間芸の一つ幫間舞を教えてもらえるというので飛び付いたんです」。板垣さんは、早速サークル「雑学塾」を立ち上げて週に一度けいこに励むようになった。平成六年のことである。今では、持ちネタも「深川」など二十を超え、年に数回、請われて宴席で踊るほどの腕前だ。アメリカ大使の前で披露したこともある。「幫間舞は、人間の滑稽さや悲哀を面白おかしく表現した『笑い』の踊り。でも珍しい



今月の

人

幫間芸は、機知に富んだ大人の遊び。独特の間を存分に楽しむのが、粋ってものだよ。

行政書士、大谷地第一町内会長として活躍する傍ら、お座敷芸の「幫間芸」を伝える

いたがき
板垣

としお
俊夫さん

(五四)

(平和通在住)

踊りだから、最初はお客さんの顔も真剣そのものでね。そこで「遠慮なくおひねり」とやると、座の雰囲気も打って変わって和やかになる。その「間」が何より楽しい」。江戸時代には全国に数百人いた幫間も、現在では数人を数えるのみだ。「楽しむ側、演じる側双方がさりげなく心を配る。それが幫間芸の粋な楽しみ方。どれだけ時代が変わっても、幫間芸の持つ粋で洒落なその匂いを伝えていきたい。「粋」は、もともと「意気」と書く。心映えのさわやかな様をいうのだから。その言葉も今や死語に近いと嘆くのは、それこそ「無粋」というものだろうか。

編集 白石区役所総務企画課広聴係
☎003 8612
札幌市白石区本郷通3丁目北1 1
☎861 - 2400 内線224
FAX860 - 5236